

複合文化学通信

第8号 新入生歓迎号

(2007 年 4 月 1 日発行)

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部 複合文化学科「複合文化学通信」編集部

(編集責任 / 福田育弘 編集補佐 / 古川誠之)

みなさん、ご入学おめでとうございます！

みなさんは、
早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部 複合文化学科 の
栄えある第 1 期生です。

今回はみなさんがこれから教室で出会い、授業を受ける複合文化学科の専任教員が、
どのようにして、

「教室の外で楽しんでいることを、
教室の中で学問にしてきたか」

が多少ともわかるよう、自己紹介をします。

「経歴や学歴」(多くの教員が多かれ少なかれ「複合的な経歴」をもっています！)にはじまり、
「みなさんへのひとこと」のほか、
「ぜひ読んでほしい、観てほしい、聴いてほしいという本や映画や音楽」をあげ、
最後にそれぞれの教員の「研究室のモットー」を述べます。

掲載は氏名のアイウエオ順です。

掲載項目は以下の通りです。

1. 略歴 (学歴もふくむ)
2. 教員から第 1 期新入生へのひとこと
3. これはぜひという本・映画・音楽
 - (1) これは読んでほしいという著作 1 冊
 - (2) これは観てほしいという映画 1 作品
 - (3) これは聴いてほしいという音楽 1 曲
(ないし CD 1 枚ないし 1 セット)
4. 研究室のモットー

1.

慶応義塾大学博士課程を卒業して、早稲田大学に嘱任しました。経済学、社会学、政治学、外交について勉強しましたが、専門は現代中国の外交、国際関係です。

2.

この1～2年のどこの新聞で読んだか記憶が定かではありませんが、ある日本人学者がアメリカの某有名大学で教鞭をとって四、五十年。定年退職した際にある記者に「アメリカってどういう国だと思いますか？」と質問されたときに、彼は「うん～、さあ～」と返答に困ったそうです。ある国を知れば知るほど、その国の多様性についてもわかってくるので、一言でなかなか言い表せないでしょうね。

ここ2、3年ありがたいことに仕事から世界を飛び回ることが多く、さまざまな国籍の学者と親しく付き合う機会をもちました。旅行ではなく、1年間以上生活した国も3カ国に上りました。こうした海外での経験から、その日本人学者の気持ちは非常に理解できます。

『中国人、会って話せばただの人』というタイトルの本がありますが、とてもいい表現です。「アメリカは……」、「中国人は……」、「日本人は……」とか物事を一括りでみるのではなく、すべての国やすべての人をただ「ただの人」としてみるって、単純なことのようにみえて意外と難しいことかもしれません。

1.

みうらじゅんが「日本のチベット」と呼ぶ《雑多》な町、高円寺で生まれました。借金を返すためだったと確信しますが、ある日突然父親が勝手に家を売却してしまったので、その後は賃貸生活を余儀なくされ、それが悲しい習性になり、現在まで●●回転居＝漂流。人生が旅かも(^_^)。高校は石神井の早稲田高等学院。いちおう理工学部に入學したのですが、女子学生がいないことを最強の理由として(^_^)、第一文学部に転部＝漂流。ドイツに2年間留学、某地方国立大学に12年間勤務したのち、1994年に早稲田に漂着。

2.

東京生まれの方も地方から来た方も、この4年間を使って東京を歩き回ってみてください。できればデジカメを持って。早稲田を中心に四方八方探索し、マイ・スポットを発見するのも楽しいですね。町には複合文化学のネタがいっぱいころがっています。そういえば「書を捨てよ、町へ出よう」というキャッチ・フレーズを作ったのも、みなさんの先輩であるT.S.でした(←問1:誰?)。入門編としては、塩地蔵尊があるこんにゃく閻魔(異界への迷入)→文京シビックセンターの展望室(鳥瞰という視座)→ラクーアのサンダードルフィン(混濁する感覚)がお薦め。付近には、某思想家が住む猫顔のビルもあります(←問2:誰?)。ポストモダンも過去の様式を折衷＝パッチワークしますが、伝統とモダンが《雑多》に混在している(調和ではなく)東京を楽しみながら、みなさんの歩行によって、東京の《雑多》さに自分のラインを書きこんでみてください。そうすれば歩く複合文化学者になれる?

3.

(1) 金塚貞文『オナニズムの秩序』

(哲学っぽくて難しいIV章やVI章は流してもかまいません)

推薦理由×3→①複合文化学が扱うテーマの多くは日常生活に隠れています。自分の周辺部に目をやると、文化が立ち上がるプロセスが見えてくることがあります。たとえば、みなさんは人間であると同時にヒトでもあるので、オナニーは身体にほとんどプリインストールされています。オナニーは近親姦や同性愛と同じようにタブー化されていますが、これらの性衝動がタブー化されることで人間の文化が成立していきます。ざっくり言えば、《雑多》さから《秩序》への編成です。②みなさんは、大学でおそらくフーコーという名前や「言説」という概念を耳にし、知ったかぶりをするようになるでしょう。しきりに語られること、あるいは語っても問題ないことがある一方で、排

除され語られないことが沈殿し、しかも語り方のフォーマットにも実はお約束があったりして、というのが「言説」の構造です。この本はその仕掛けをうまく説明してくれます。③複合文化学は立ち上がったばかりの「学」問ですが、ヒトの性衝動に関する話は今からだいたい100年前頃に学問になりはじめました。性科学という学問です。性科学の歴史をながめれば、一般に、学問と言われている営みが、最初から学問だったのではなく、元来は生き生きとした好奇心から発したことが分かるはずです。さて、タイトルに引かれて興味本位でこの本を読む人、あなたは複合文化学を学ぶ最初のハードルをクリアしました。興味本位を大切にしてください。興味が無いのに、「教授に言われたから」とか「必読文献に入っているから」などという教養主義から本を読むことくらい、つらいことはないです。少なくとも私にとっては。

(2) タルコフスキー『サクリファイス』

今はやりの《セカイ系》に分類されるかもしれません。1986年に発表されました。チェルノブイリ原子力発電所とスペースシャトル・チャレンジャー号が爆発し、日本ではバブル景気が開始した年とされています。みなさんがこの世に生を受ける数年前のおどましくも楽しい時代にふさわしい、チョークールでチョーホットな映画です。パッハのマタイ受難曲の"Erbarne Dich"が頭から離れなくなるはず。武満徹は新しい曲を書くとき、かならずこのアリアを聴いた言われています。DVDは絶版。大学の図書館で観ることができます。

(3) スクエアプッシャー『GO PLASTIC』

私にとって音楽はお勉強の対象ではなく、お勉強をする際に脳を活性化してくれる合法ドラッグにすぎず、個人的な嗜好が反映しているのでお薦めしません。ヘッドフォンを装着した脳内では、岡村靖幸、マッシヴ・アタック、クセナキス、70年代のマイルスが混在しているので、いちおうCross the border - close the gapかも。

4.

私の研究室は、「事務処理」と「授業準備」のための悲しい「仕事室」です。この二つで両手がふさがっていますが、いちおう「研究室」という名称を剥奪されないために、ごくまれに、恥ずかしながらシコシコと「研究活動」にふけることがあります。事務処理→授業準備→研究活動→みなさんのおしゃべり、という順番で自分の時間を使っているの、研究室を訪問される場合は、メールによってアポイントメントをとっていただけると、激うれし、です。最後に:「一体全体学者といふ者は、弱虫で引込み思案の癖にうぬぼれの強い動物だ」という山本宣治(←問3:この人、誰?)の言葉をドスのように懐に入れて研究室をノックすると、大事に至らないですむかもしれませんよ。

1.

・神奈川県に生まれる。神奈川県立湘南高等学校卒。

高校時代は体育祭実行委員会、文化祭実行委員会、部活動(生物研究部/放送部)と課外活動ばかりに専念。小学校から高校までをかけて、当時発売されていた日本語訳本のSFをほぼ読みおえた。

・早稲田大学 教育学部理学科生物学専修、同大学院理工学研究科物理学及応用物理学専攻生物物理学部門修了 博士(理学)取得

光合成のしくみを明らかにすることにより世界のエネルギー危機を救う、とまじめに研究。測定機器作成や制御プログラムを通してコンピュータを扱うようになる。

・早稲田大学 教育学部助手(生物学専修)

今でいうリメディアル教育に、当時普及しつつあったWorldWideWebを使えないかと教育の情報化に関する研究をはじめめる。その結果、教育学部助手(情報化推進委員会)として異動。同時期に早稲田大学MNC兼任助手に。

・早稲田大学 専任講師(視聴覚教育メディア論等担当)として採用

以後現在に至るまで教育の情報化、科学(啓蒙)教育に関して教育・研究をおこなってきた。

2.

学際といっても中心となる学問分野を押さえる必要があります。たとえば私のゼミを選択するなら、それは広義の情報学となります。本学科は多様な専門を持つ教員がいますので、それをじっくりと選ぶとともに、必要な基礎をきちんと学んでください。大学はモラトリウム機関(期間?)ではありません。

3.

(1) おすすめの専門書はありますが、まだ早いので入学前に軽く読み飛ばせるSFから。

A・E・ヴァン・ヴォクト:宇宙船ビーグル号の冒険(1950)(電子ブックでも売られます)

この本の主人公はネクシャリズム(情報統合学とか総合科学とか訳されているようです)を修めた人で、それぞれの学問分野の専門家が発見した事実を組み合わせ、専門家よりもより効率的に応用するというストーリーです。これまでネクシャリズムという概念は夢物語と考えられていましたが、コンピュータやネットワークの発展によりその一部は実現可能となってきました。みなさんもそんな人間を目指してみませんか?(ただし本の記述内容はSFなのであくまでもフィクションですよ。)



(2)

いわゆる"お涙ちょうだい"、"愛と感動を"、といった映画はあまり好きではありません。暗に思想を押しつける(美化する)ようなものも嫌いです。大学~大学院修士時代に(古い映画を3本1000円程度でみれる)名画座を中心に100本程度しかみていないので、他の先生方のように蘊蓄[うんちく]もありませんし、残念ながら是非みってくれという映画もありません。

ただ、映画作成にかかわる技術(SpFXやVFX)、映画館の音響や映像機器は大好きです。

最近ヒットした『ALWAYS 三丁目の夕日』ではストーリーではなく、VFXを効果的に使った昭和30年代(*)の風景に涙しました。(*ちなみに私がそだったのは、昭和40年代ですが、あまりかわりありませんでした。)

(3) 松武秀樹/Logic System 東方快車

私が高中時代を過ごした80年代は、テクノポップ全盛期でした。ドイツのクラフトワークや、(最近CMで復活?した)YMOの、いかにもな電子音に驚き、そして感動したものでした。音楽にはそれほど貪欲ではなかったため、未だに当時と同じ曲を環境音楽として聴き続けています。その中でもお気に入りにはYMOの4人目のメンバーといわれた松武秀樹が主催していたLogic Systemのアルバム「東方快車」。A. W. Ketelbey 作曲の著名な「ペルシャの市場にて」の一部を、シンセサイザーを使って表現したものが含まれていますが、この幻想的な雰囲気を出すという点では、管弦楽による表現を超えているのではないかと思います。

4.

文理融合型の理系部分にあたります。私の出身が実験系であることもあり、理科系的な研究スタイルすなわち、「ゼミ生は授業以外の時間は実験実習室で学ぶ」という形をとることになると思います。意欲のある学生はぜひトライしてみてください。しかし、ただがむしゃらにやればよいわけではありません。たまには休むことも重要です。そんなとき、私は1人で静かな日帰り温泉に行くことにしています。写真はこの夏煮詰まったときに行った温泉での作業環境です。8時間の滞在でとても作業が進みました。

1.

1947年徳島県鳴門市生まれ。家のすぐ前が海で、その200メートルぐらい先は小さな島です。たまたま東京外国語大学ロシア語科に入学し、たまたま同大学院に進んでしまいました。そのため、「なぜロシア語を選んだのですか」とたずねられるといつも困っていますが、結果的にはロシア語を選んでよかったと思っています。東京だけでなく長野、岡山などでも非常勤講師を勤めた後、1979年に東京工業大学に赴任、88年に東京大学に移り、2001年からは早稲田大学に勤めています。現在の専攻は表象文化論とロシア文化です。



2.

前に所属していた大学でも経験したのですが、新設の学科にはそこでしか味わえない独特の雰囲気があります。それは、学生のみなさんはもちろんのこと、教員もまた新鮮な気持ちで再スタート地点に立っているからだと思います。たがいに同時に出発するわけです。それともうひとつ楽しいのは、教員側が用意しているいくつもの道以外に、みなさん自身がまた別の道をつくりだす可能性があることです。第一回生のみなさんのパイオニア精神に期待しています。

3.

(1) ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』

新潮文庫や岩波文庫でも読めますが、亀山郁夫氏による新訳が光文社文庫で刊行中です。最後の巻は5月に出る予定ですので、ちょうどいいかもしれません。主要な登場人物のそれぞれが「複数の声」をかかえこんで未完の対話をつづけていくこの小説は、何度読み返しても最終的な答えが得られません。

(2) マルセル・カルネ監督『天井桟敷の人びと』

お勧めの映画は数多くありますが、ひとつとなるとやはりこれでしょうか。19世紀半ばのパリにまだ保たれていた見世物小屋をはじめとする祝祭空間や、「舞台の上の舞台」を観ているような「芝居臭さ」、「非日常性」が、みごとに映像化されています。女芸人ガランスも無頼漢ラスネールも愛すべき人物ですが、なんといっても、ジャン＝ルイ・バローが演じるパントマイム芸人バチストが最高です。

(3) ゲルギエフ指揮、ショスタコーヴィチ『交響曲第4番ハ短調 作品43』

ショスタコーヴィチはこの作品を1936年4月に完成させたものの、12月に予定していた初演を撤回しました。撤回の理由には諸説がありますが、いずれにせよスターリン体制との確執があったことには変わりありません。1961年になってようやく初演の機会を得ました。ゲルギエフの指揮は、こうした全体主義的な状況下での芸術家の闘いを誰よりも説得力豊かに復元しています。

4.

「研究室」は16号館の815ですが、私の場合はここで研究に没頭することはほとんどありません。ときには読書会をしていたり、あるいは院生・学部生の論文指導をしているかもしれませんが、基本的には学生のみなさんとの交流の場だと考えています。ですから、ちょっとのぞいてみてください。



1.

東京オリンピックの最中に、埼玉県川口市で生まれる。以後も埼玉県内で100%純粋培養されるも、これといって特徴のない埼玉県に対する郷土愛は限りなくゼロに近い(!?)。埼玉県に負けず劣らず、自分自身も高校まで凡庸な生活を送ってきたが、なにを血迷ったのかスペイン語を学ぶことを決意し、東京外国語大学スペイン語学科に入学。これがその後の人生を大きく左右することに。同大学院地域研究研究科修士課程修了(国際学修士)。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。南米ペルー留学(1990-91年)。青山学院大学文学部勤務を経て、2000年に早稲田大学に着任。現在に至る。ラテンアメリカ思想文化史専攻。人種・民族・エスニシティ論全般に関心あり。

2.

入学おめでとうございます。新設の学科に飛び込んできたみなさんは、スペイン語の「ス」の字も知らずに「どれ、いっちょうスペイン語でもやってみるかな」と思いついてしまった私に、どこか似てなくありません(笑)。どうかこれからも、その「無謀さ」をいい意味で大切に、さまざまなことに果敢にチャレンジしてください。新学科では、選択した外国語が卒業研究のテーマに直結するとは限りませんが、それでもすべからく外国語の学習は大切であるということを、くれぐれも肝に銘じておいてください。

3.

(1) ホセ・マリア・アルゲダス著『深い川』(杉山晃訳、現代企画室)

クスコの街を皮切りにアンデス南部を旅するなかで、白人と先住民世界の〈境界〉を生きる少年の成長譚。私をラテンアメリカ研究へと誘うことになったペルーの作家の代表作。ちなみに、日本には同タイトルの遠藤周作『深い河』があるが(未読)、「川」をモチーフとした少年・青年の成長譚といえば宮本輝の『泥の川』・『螢川』・『道頓堀川』の〈川

三部作〉(ちくま文庫)が秀逸。新入生であれば、宮本の『星々の悲しみ』・『春の夢』(文春文庫)を読むもまたよし。

(2) 井筒和幸監督『パッチギ!』(シネカノン配給、2004年)

本にしても映画にしても、ひとつだけ選ぶなんてどだい無理な話だが、成長譚ということで絞るなら、最近のラテンアメリカ映画ではずばり『モーターサイクル・ダイアリーズ』なんだけど、これはすでに紹介済み(「複合文化学通信」第5号参照)。というわけで日本のこの作品。京都は鴨川(おおっ、これも「川」つながりだ!)を象徴的に挟んでの、在日コリアンと日本人高校生の交流を描いた青春群像。日本でも〈境界〉はいたるところに引かれている。それをいかに「越えて」いくかが問われている。主人公が鴨川に架かる橋の上でギターを叩き壊すシーンは泣ける。バックに流れるオダギリジョーがカバーする名曲「悲しくてやりきれない」もせつなく響く。本年5月には続編が公開予定。

(3)『ラテンアメリカ光と影の詩』オリジナル・サウンドトラック (BVCP-794)

アルゼンチンのフェルナンド・E・ソラナス監督の1992年作品。原題は“El viaje”(旅)。父を捜し求めて南米大陸を放浪する青年の姿を描いた、これもまた若き主人公の成長譚。映画自体はいささか冗長に過ぎるところがあるけれど、このサントラは詩歌ともにすばらしい。スペイン語履修者でなくても必聴。ついでながら、もしボサノヴァを聴くなら、巨匠の夢のコラボレーション、不朽の名盤『ゲッツ／ジルベルト』(B00008KJU4)をお奨めしたい。軽快なのに哀切が漂い、行ったこともないのになぜかブラジルがなつかしく感じられる、これぞまさに、ボサノヴァの旋律とポルトガル語の響きが醸し出す“saudade”(サウダージ=郷愁)の真骨頂!

4.

「およそ人間に関わることで、私に無縁なことはひとつもない」「えーこれは、古代ローマの詩人テレンティウスの喜劇のなかのセリフでありまして……」なーんて、えらそうに解説できる資格なんてじつはありません。研究室のモットーなど特になかったので、なんとなく聞き知っていたこの警句をこの機会に確認し、取り急ぎ掲げてみた次第(笑)。とはいえ、まさにここに示されているように、身近であるかないかにかかわらず、人が織りなす現象であればなんであれ興味・疑問を持ち、その現象がはらんでいる〈複合性〉を解き明かしてゆくのは、私自身実践したいことであり、またみなさんにもそうあってほしいことです。そして願わくは、そうして選んだテーマが、たんなる趣味の領域に留まらず、なんらかの〈社会性〉を帯びているならばさらに申し分ありません。



(写真はマルクスの生地、ドイツ、トリアーのポルタ・ニグラ)

1.

1950年宮城県仙台市生まれ。立教大学文学部ドイツ文学学科卒業。埼玉大学大学院文化科学研究科言語文化論専攻修士課程修了。専攻は近代ドイツ・ヨーロッパを中心とする思想史および現代社会・文化理論研究。1987年早稲田大学教育学部専任講師。89年同助教授。94年同教授。ドイツ語の講義を担当するかたわら、学際コース発足時より「異文化交流接触論」「現代社会・文化総論」「現代思想」「現代芸術論」などを担当。また文学部および文学研究科で「社会科学論」「ドイツ思想講義」「社会学特論」などを、アジア太平洋研究科で「社会科学の基礎」を担当。最近は近代日本思想史研究にも手を染めている。

2.

新入生みなさん、入学おめでとうございます。複合文化学科はみなさんを第一期生として迎え入れることになります。ともに新人どうし、新しい学科の創設とその中身の構築をともに担ってゆくわけです。大学という言葉は「大いに学ぶ」という動詞形の言葉であり、本来できあがった制度を表す言葉ではありません。とくにこの複合文化学科には既存の実績も体制・組織も存在しませんから、すべてがゼロからの出発になります。だからこそみなさんの、そしてもちろん私たち教員もそうですが、「大いに学ぶ」動詞的な態度にこそこの学科の未来はかかっています。

3.

(1) マクス・ホルクハイマー／テオドーア・W・アドルノ『啓蒙の弁証法』(徳永恂訳 岩波文庫)。

著者たちは、20世紀に登場した「新しい野蛮」であるナチズムの起源を遠く古代ギリシアにまでさかのぼって、

ヨーロッパの文明史全体の問題、とくにそれを突き動かしていた原理としての「啓蒙」(人間の理性作用)の持つアイロニカルな暴力性から捉えようとしていました。この本を読んでいると、現代社会における抑圧やいじめ・差別、CMによる消費者の意識操作、ネット・チャット現象などがすべてナチズムに象徴される20世紀の全体主義現象と無縁でないことが分かります。難解な本ですが、私たちの時代の根源である20世紀を知るための必読書です。

(2) リヒャルト・ヴァーグナー・楽劇『ニーベルングの指環』(全四部作)。

オペラ史上最長(全部で約15時間)のこの作品は、貨幣=資本を主人公とする近代産業社会の複雑な弁証法と、そこに組み込まれている多様な要素(貨幣=資本はもとより、欲望、権力、性、芸術、革命などの要素まで)を音楽劇の象徴性の次元を通して形象化しています。ヴァーグナーの同時代であり、共通の友人の存在など浅からぬ因縁のあるマルクスの『資本論』とこの『指環』を重ねあわすとき、はじめて19世紀から現代へいたる近代史の歴史の原像が明らかになるとさえいえるように思えます。

(3) サタジット・レイ監督作品:『大地のうた』『大河のうた』『大樹のうた』三部作

1950年代のインドで製作されたこの映画は、ある面からいえばジャン・ルノワール(仏)や溝口健二(日)らの影響下においてインドを映像化した「オリエンタリズム」映画という性格を持っています。じっさいレイはインド国内ではあまり評価されない監督でした。しかしベンガル地方の貧しいバラモン一家に生まれた主人公オプーの成長を追うこの教養小説的映画が、近代と遭遇し翻弄されるアジアの一隅でどのような深いドラマが演じられつつあったかを清冽に描ききっていることもまた事実なのです。なによりその映像世界の透明度と結晶度の高さに驚かされます。

4.

私の研究室の本棚には、マルクスのとなりに印象派研究の本があり、そのとなりに日本古代史の本が並んでいます。この雑駁さからも分かるように、私の研究室はどんな分野も問題関心も拒まないことをモットーにしています。そして自分がそうであったように研究は基本的に「独学」すべきものだと思います。自分で問題を発見し、自分で資料を探し、方法を考え、まとめてゆく、その過程が大切なのです。私たち教員はあくまでそれを傍らからサポートするだけです。そして研究に関して教員と学生が本質的に対等だということも申し添えておきましょう。



(写真は中国の三峡)

1.

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程中国文学専攻修了。愛知淑徳大学文学部教授を経て、現在、早稲田大学教育・総合科学学術院教授。この間に北京大学中文系で在外研究。

専門は中国文学(主として盛唐・中唐詩)、日中比較詩学ですが、趣味として、短歌・俳句・漢詩も少し作っています。

2.

『論語』に、「学びて思はざれば則ちくらく、思ひて学ばざれば則ち殆(あやふ)し」という孔子の言葉があります。どのような時代になっても、何を学び生み出すにしても、読書と思索とは、車の両輪のごとく不可欠な行為であろうと思います。たとえ複合文化学科であっても。

3.

(1) 松浦友久『漢詩—美の在りか』(岩波新書)

漢詩について、目から鱗が落ちます(たぶん)。

(2)「ベン・ハー」(チャールトン・ヘストン主演、1959年)

212分の大作。手に汗握る感動の連続ですが、最後までキリストの顔が見えないところもまた感動的です。

(3) 谷村新司の「昴」

疲れたときに聴くと、少し元気が出ます。

4.

対他的には、俗諺にいう「来たる者は拒まず、去る者は追はず」、対自的には、「水流るも心は競はず、雲在(あ)りて意は俱(とも)に遅し」(杜甫「江亭」)でありたいと思っています。



1.

神奈川県川崎市生まれ。地元の小学校、横浜国立大学付属中学校、学芸大学付属高等学校を経て、東京外国語大学スペイン語科に入学。ビートルズ、フォークにラテンが混じるようになる。スペインの古典よりもゲバラを生んだラテンアメリカに興味を抱き、指導者なしでエクアドルの小説について卒論を書く。大学院に進みネルーダで修論。

71年にアルバイトでテレビ取材班のアシスタントとしてキューバ訪問。立ち寄ったLA、メキシコシティとの違いに驚く。

院生時代からスペイン語の非常勤講師となり津田塾大学を皮切りに10近い大学で教える。東京工科大学助教授に就任後、立教大学に移り、法学部、文学部大学院比較文明学専攻の専任教授を務める一方、テンアメリカ研究所長として研究者、作家、アーティストなど多くの文化人を講演会に招く。2年前に早稲田大学に移籍。1992-93年カリフォルニア大学アーバイン校客員研究員、1999-2000年コレヒオ・デ・メヒコ客員研究員。ネルーダ研究によりチリ大統領賞受賞。ボルヘス会会長。

2.

協調性は大事ですが、集団に埋没せず、中田英寿のようにつねに頭を動かして自分の立ち位置を確認すること。所属集団の常識は外の世界の非常識かもしれません。母体が大きいと錯覚を起こしがち。複合的に考え、批評すること。言葉に敏感になること。自分の言葉は仲間内のジャーゴンかもしれません。物事を深読みすること。メジャーや権力の言葉の裏まで見透かすこと。世界を読み解こうとすること。

3.

(1) ガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』(鼓直訳) 新潮社

作者はコロンビア出身ですが南米・ヨーロッパを放浪し、メキシコシティでこの作品を完成させました。物語の面白さをたっぷり味わわせてくれる本ですが、ヨーロッパ中心の世界、権力者の書いた歴史を脱構築する力を備えています。学生時代にこの20世紀の生んだ最大の小説のひとつを読むことは大きな財産になるはずです。

(2) ビクトル・エリセ『ミツバチのささやき』

映画産業と妥協しないスペインの孤高の監督エリセの作品で、思春期に差し掛かる少女の眼を通して世界の謎を詩的に描いています。そこから境界を越えて大人の世界に足を踏み入れた人間には見えなくなってしまう多くのものが見えてきます。歴史に対する神話的世界。いま君たちに見えている世界が唯一ではないことを再認識させてくれる映画です。

(3) アストル・ピアソラ「リベルタンゴ」

タンゴを破壊したと言われるピアソラ。少年期を過ごしたNY体験、パリでのクラシックの勉強が融合されて生まれた曲ならどれでもかまいませんが、彼以前のタンゴと比べるとその破壊力がはっきりと実感できるでしょう。「リベルタンゴ」は聴きやすく、テレビのCMで有名になりました。

4.

真摯であれ。しかしユーモアを忘れるな。

〈早稲田文化〉には独特の魅力がありますが、それに安易に乗ってしまうと、物事を自分自身の手で行うことの新鮮さ、不安、困難を忘れ、いい加減さ、不真面目といった要素がもてはやされる雰囲気染まりがちです。融通の利かない真面目さは困りますが、真摯であることは必要です。テレビが安易な笑いを大量に流す今日、洗練されたユーモアが感じられる機会は減多にありません。そこには知性や経験が育んだ知恵といったものが欠けているからです。ここでいうユーモアは硬直した世界や権力を転倒させると同時に、人間性を輝かせ、他者・異文化を受け入れる入り口にもなるような種類のもので、遊びや寛容の精神とも結びついています。



1.

【育った場所】長野県の山の中。アルプス山麓の森の町。

【少年時代の夢】航空力学を学び、宇宙ロケットの設計技師になるのが夢だった。

【学生時代】早稲田大学理工学部合格するも入学辞退。阿佐ヶ谷で下宿しながら、二年間、ヒッピー生活を送る。ハードロックと読書三昧の日々。インドへ渡り修行僧になる計画も、ヘタレなボクは結局断念。笑っちゃう二年間。ある正月、他にやる事がなかったので、フッと大学受験を思い立つ。受験勉強は二年前の記憶だけが頼り。結局、立教大学文学部ドイツ文学科に拾ってもらった。なぜ立教で、どうして文学部で、しかもドイツ文学だったのか。そんなのはすべて偶然の結果。ボクにもよく分からない。

大学ではテキスト理論と文化記号論を徹底的にたたき込まれた。今でも、テキスト理論とか聞くと、少しだけウンザリする。でもなんだかんだで、大学院博士課程の在学中に就職が決まった。赴任地は神戸大学。迷ってばかりだったけど、結構面白かった東京での学生生活 10 年間だった。

【教師生活】神戸大学国際文化学部で 11 年、立教大学文学部で 10 年、早稲田大学に来て 4 年。大体 10 年単位で彷徨ってる。まるでローリングストーン。放浪癖は治っていないらしい。ボクの研究も同じで、一つの場所に凝り固まっていない。ドイツ文学研究・テキスト理論から文化記号論へ、都市論・メディア論から表象文化論へ。カフカからベンヤミンへ、バルトとフーコーからキットラーへ。文学からポピュラーサイエンスへ。内的必然性があるからと言いつつ、戦線は拡大する一方だ。思えば 30 年前、理系から文系へと転身したのだったし。ボクの中の DNA は変わりようもないか。

2.

「良い感性している奴」とか、「良いセンスしている」とか言う。服の趣味じゃない、世界観のことだ。ボクもセンスの良い奴は好きだ。というか、センスの悪い世界観は好きじゃない。良い感性がないと、素敵な世界観はなかなか持てないものだ。感性は大事である。でも、感性だけで終わるのはダメだ。一般に、感性と理論は反対物のように思われているが、これは間違いだ。感性と理論は補完関係にある。いわばメダ

ルの裏表の関係なのだ。感性無き理論は蒼白く、理論無き感性は傲慢である。自分の感性は大事にするのがよろしい。それなしには、何も始まらないからだ。しかし、感性を感性のままに終わらせてはいけない。君にしかない感性を、理論をもって強靱なものに仕上げるのだ。自分の感性を理論で鍛え上げたかったら、ボクと一緒に学ぼう。入学おめでとう。

3.

(1)『変身』フランツ・カフカ

ドイツ文学科だったから言うわけじゃないが、二〇世紀文学の先駆者というだけあってカフカの語り口は「恐い」。ホラー映画なんか目じゃない。絶望のなかに見えた希望も、じつは欺瞞だったというカフカの仕掛けに、心底の恐怖を味わってくれ。「読後の爽快感」なんてたわごとは、すべてぶっ飛ばしてくれる。

(2)『イーザーライダー』デニス・ホッパー監督

ヒッピーだったから言うわけじゃないが、一切のイデオロギーを拒絶するとはこういうことだ。ハーレーにうちまたがり、都会を捨てて虚構のユートピアを目指す二人の青年の悲劇は、「出口なし」という状態の鏡像にほかならない。逃避行の不可能性とむきあう。これは今でもボクらの原点だ。問題は、そこでもなお何が出来たかだろう。

(3)『ストーン・フリー』ジミー・ヘンドリックス

ロック・フリークだから言うわけじゃないが、ジミヘンに比べれば、クラプトンもジェフ・ベックも色あせて聞こえる。手近なところでは、MCA の『エクスピリアンス・ヘンドリックス』の六曲目に収録されてる。「ストーン・フリー」とはドラッグでぶっ飛ぶこと。ただしジミヘンは、楽曲でぶっ飛んでる。薬でしかぶっ飛べないのは、感性が鈍い証拠だ。

4.

とりたてて研究室のモットーなんてないけど、ひとつだけ。「来たれ、真のオタク。」ボクのゼミはオタクの集団だ。いじめ問題のオタク、教科書のオタク、ブラックミュージックのオタク、漫画のオタク、自動車のオタク、ファッションのオタク、映画のオタク、文学のオタク。自分なりの「強いこだわり」を持った学生こそ大歓迎だ。何にこだわっているかは、一切問わない。下らないものにこだわっていても、一向構わない。ちなみにボクはスケールプラモデルのオタクだ。問題はなににこだわっているかではなく、どれだけこだわっているかだ。原ゼミでは、その「こだわりの深さ」を出発点にして、一見なんの変哲もないように見える日常的なモノのなかに潜んでいる、奥深い表象構造をあぶりだす。誰もが知っているモノのなかから、誰も気づかなかった表象構造を析出する。これが原ゼミの狙いだ。これこそ新しい世界認識を手にする第一歩だからだ。そんな四年間にしたい諸君、来たれ原ゼミに。待ってる。



(写真は、フランス、ブルゴーニュ地方、モンラシェのぶどう畑)

1.

1955 年名古屋生まれ。名古屋生まれですが、母親が大阪、父親が紀州なので、アイデンティティは西の方にあります。二日酔いのときは、そばよりうどんが食べたくります。ただ、配偶者からは「インチキ関西人」と呼ばれていますが。忘れかけていますが、相手がいれば名古屋弁はとりあえずネイティブです。

愛知県立旭丘高等学校卒。2 年生あたりから、まともに勉強しなかったため(とくに英語と古典)、内申 3.0 を切り(!) 2 浪して早稲田大学第一文学部になんとか入学。同大学フランス文学専攻卒業。早稲田大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士後期課程中退。1985 年から 88 年まで、フランス政府給費留学生としてパリ第 3 大学博士課程に留学。1991 年から年流通経済大学の教員となり、1995 年早稲田大学教育学部に嘱任。その間、2000-2001 年に南仏のエクス・アン・プロヴァンス大学で在外研究。

高校時代、とにかく英語が嫌い、もともと外国語にさほど興味がなかった(たとえば、フランスに生まれればだれでもフランス語がしゃべれて読めるじゃないか、と不遜にも思っていたので)、まさか外国語を教える身になろうとは、中学高校時代の自分に出会っても信じてはもらえないでしょう。とりあえず、やっていることは、ポストコロニアルの複合文化、とくに〈飲食表象論〉です。

2.

新しい学科に入ってこられたみなさんの勇気に敬意を払います。みなさんの新鮮な心意気にこたえる授業をするところかけますが、みなさんもぜひ自身の関心をせばめたり、好奇心を失ったりせず、つねに多様なもの、異質なものへの興味をもちつけ、さらにそれらを広げていってください。

しばしば、「学問」や「研究」は自身の興味や関心をせばめることだという誤解がありますが、複合文化学科では、多様な関心を多面的に展開することが、学問や研究の基盤となることを忘れないでください。

3.

(1) 吉田健一『金沢』講談社文芸文庫

作者は、そう、あの敗戦期に日本を牽引したワンマン宰相故吉田茂の息子で、イギリス文学やフランス文学に関する翻訳や評論が多数ある英文学者で評論家です。この作品は、そんな吉田健一が 50 代になって書きはじめた小説のひとつ。古都金沢を舞台に、おもに飲食をとおして、時空間を自由にかけめぐるユートピア小説です。ユートピアとはもともと「ここにはない場所」「非在郷」という意味ですが、この小説を読むと、ユートピアとは日常のどこにでもありえる場所なのだと気づかれます。どこからなにがどうなっているのかよくわからない息の長い吉田健一の文体が、いよいよ冴えわたり、破格な展開を示して、一種「突きぬけた」感じです。

(2) アン・リー監督『ブロークバック・マウンテン』(アメリカ 2005)

アン・リーは現存する監督でもっとも人間描写がうまい一人で、いつもうならせてくれます。もちろん、泣きも、笑いもあるのですが。多分、台湾出身で、アメリカで暮らしているという部外者の視点がいいのしょうね。この映画も、マッチョのプロテスタンティズムの国では認められない〈クローゼットゲイ〉を描いていて泣かせます。アメリカの飲食シーンもけっこう重要です。「複合文化学テーマ演習 1」では、同じアン・リー監督の飲食人情喜劇『恋人たちの食卓』(原題『飲食男女』)を取りあげます。

(3) マーラー 交響曲 第 5 番

どうしようもなく打ちのめされた危機的な状況で、わたしは 2 度ほど音楽に人生を救われました。そのうちの 1 度が、マーラーの音楽との出会いでした。25 年ほど前、およそ 2 年間、東京でマーラーの交響曲の演奏会があると、オケやソリストにかかわらずほぼすべて聞きにいきました。どの交響曲も好きですが、やっぱり完成度から 5 番でしょうか。マーラーの現代的再評価も、この 5 番から始まりました。25 年前は、「なんて分裂的な音楽か」という声も聞かれましたが、その激しい振幅こそ、マーラーの真髄です。映画『ヴェニスに死す』の冒頭で使われた弦楽器のみの美しいアダージョ楽章から、いきなり管楽器が鳴り、おもちゃ箱をひっくり返したような終楽章への移行こそが！

4.

福田研究室のモットーはパリ市のモットーでもある

「たゆたえどしずまず」です。

一見軟弱そうにみえて、硬直したり独善的になったりすることなく、つねに柔軟で、外のものを受け入れ、活発に議論をしながら、多面的にものごとに取り組む精神を示しています。研究室の扉はだれにでも開かれています。ときに激しい議論で大揺れになっても、それを糧「かて」に豊かな思考を築いていこうと思います。



1.

東京外国語大学フランス語科卒業、パリ第八大学文学博士。
欧州でも大きな多民族国家フランスに 10 年滞在。

2.

ますます生き辛い世の中です。利益や金など数値に計算
されてしまわない自分自身の価値観の形成に向けて今から
の四年間でいろいろ考えて、充実した大学生活を送ってく
ださい。

3.

(1)

推薦する本。小説を何冊か挙げます。

トーマス・マン『トニオ・クレーゲル』 スタンダール『赤
と黒』 カフカ『城』 セリーヌ『夜の果てへの旅』

それ以外に、今の日本について考える意味で 加藤周一
『私にとっての二十世紀』

(2)

推薦する映画。

「緑の髪の少年」(J. ロージー監督) 「赤い河」(H. ホー
クス) 「上海から来た女」(O. ウェルズ) 「現金に手を出
すな」(J. ベッケル) 「東京物語」(小津)

(3)

推薦する CD。

とりあえずピアノ・ソロをいくつか。バッハ「平均律ク
ラヴィーナ第一巻」(リヒテル) ベートーヴェン「三大ソ
ナタ」(ギレリス) シューマン「交響的練習曲」(ポリニー)

4.

なし。

村上 公一(むらかみ きみかず)



1.

1956年愛知県に4人兄弟の末っ子として生まれる。名前が「公一」なのでよく長男と間違えられるが、本当は次男。名前の由来を両親に聞き損ねてしまった(両親ともにすでに鬼籍に入っている)。

名古屋大学で大学、大学院生活を送る。大学院博士課程在学中に中国上海の復旦大学に2年間留学。1988年に名古屋大学文学部助手、1990年に福井大学教育学部助教授、1997年から早稲田大学教育学部に。

IT環境下での多言語間のコミュニケーションや外国語習得のあり方に関心がある。また、言語や文化の越境現象に興味を持っている。

2.

ゼロから始まる学科です。みんなでいっしょに学び格闘していく場を作り上げていきましょう。新しいことを始めるのはわくわくして、楽しいですよ。私は新しいことを始めるのが大好きです。持続力が足りないのが問題なのですが。みなさんは是非、4年間このわくわく感を持ち続けてください。

3.

(1)『竹内好セレクション I 日本への／からのまなざし・II アジアへの／からのまなざし』(竹内好著、丸川哲史・鈴木将久編、日本経済評論社)

私は個人の全集をあまり持っていない。大学に入り、20代前半までに買った個人の全集は『三遊亭円朝全集』(角川書店、全7巻、別巻1)、『漱石全集』(岩波書店、新書版、全36巻)、『竹内好全集』(筑摩書房、全17巻)の3種。これが現在の自分自身の出発点のような気がする。

竹内好は魯迅の翻訳で有名な中国文学研究者だが、同時に、アジアから逆照射することにより日本の近代の意味を考え抜こうとした戦後の一時期を代表する一人の思想家でもある。最近再び脚光をあびつつあるようで、昨年末に上

記2冊が刊行された。第一冊の冒頭に置かれた「屈辱の事件」は1945年8月15日の彼自身の回想である。「八・一五は私にとって、屈辱の事件である。民族の屈辱でもあり、私自身の屈辱でもある。」彼の言う屈辱とは何か。興味のある方は生協にも並んでいるので、手にとってみてください。

(2) 侯孝賢監督『悲情城市』(台湾、1989年)

台湾が1895年に中国(当時は清)から日本に割譲されたのはご存知ですね。日清戦争の結果です。当然のことですが「台湾民主国」独立宣言など抵抗運動が起きました。日本は軍隊を投入してこれらを鎮圧しました。その後50年間、台湾は「日本」だったのです。1945年、敗戦と共に日本軍は去り、かわって大陸から勝者としての国民党軍がやってきます。当初は台湾の人々も国民党軍を熱烈に歓迎したのですが、国民党軍から見れば、長年「日本人」として暮らし、中国語もろくに話せない台湾の人々はまともな「中国人」ではなく、蔑視と搾取が始まります。ここから両者の衝突が起きます。国民党軍は武力で鎮圧し、そのまま弾圧へと進んでいきます。

『悲情城市』は1945年8月15日の玉音放送から始まります。その後の数年間の激動に翻弄され、悲しみの淵に沈み、それでもなお希望を求めて生きつづける一つの家族を描いています。美しい風景、音楽、そして二人の主人公の男女の沈黙の語らい(主人公の男性は聾啞者です)が印象に残る映画です。

(3) 黎錦光作詞・作曲、李香蘭唱『夜来香』

戦前の満州に李香蘭という一人のアイドル女優がいました。彼女の演じる抗日の少女は、毎回かならず、日本人男性と出会い、恋に落ち、やがては抗日の心を融かされていくのです。その後、上海に移り住んだ李香蘭は中国人監督の映画に出るようになり、一躍大スターになっていきます。その彼女が歌った『夜来香』。1945年初夏、上海で開かれたリサイタル『夜来香幻想曲(ラプソディー)』は熱狂的なものでした。その2ヵ月後に8月15日がやって来ます。李香蘭、実は日本人だったんですね。日本に帰国した彼女は山口淑子として今度は日本語で『夜来香』を歌います。「あわれ春風に 嘆くうぐいすよ、、、」。2月中旬に上戸彩主演の2夜連続テレビドラマ『李香蘭』やってみましたね(みなさん受験でそれどころではなかったですか)。

4.

モットーは私一人で作るものではなく、研究室に集う学生諸君が作り上げていくものだと思います。新しい組織ができれば新しいモットーが生まれる。みなさんとの間でどのようなモットーが形づくられていくか、楽しみにしています。

渡辺 芳敬(わたなべ よしたか)



(渡辺ゼミの学生の作品「達磨」)

1.

宮城県出身です。早大一文卒。充実したキャンパスライフでしたが、教室が一番遠かった。要するに勉強しなかったということです。1984年から3年半パリ第一大学（哲学科）に留学。メルロー＝ポンティを中心にフランス現代思想を勉強しましたが、最初の1年は映画三昧。皮肉にも、アメリカ映画と日本映画をみまくりました。まだビデオ全盛の時代ではなかったので、古い映画を日本で見るができなかったからです。帰国して、浴びるように見まくることになりましたが。ここ数年は、映画以上に、舞台に走っています。三重大学、横浜市立大学を経て、2年前に早稲田大学に赴任しました。教育学部生は、国公立の学生気質にかぎりなく近いというのが偽らざる印象です。

2.

痴呆にならないよう都会にでてきましたが、地方出身者の悲哀はいまも消えません。早稲田は規模が大きいぶん、いながらにして異文化交流が体験できる稀有な場所ですが、いまそれを誰よりも実感しているのは、教師の僕かもしれません。というのも、えてして、学生時代は人間関係が深まるようでそうでもないからです。つきあいたい人とのみつきあうというパターンが多く、授業もいやなら出なければいいわけですから。人が多いぶん、孤独になるのも早稲田。教室を近くするのも遠くするのも、そうあなた次第です。

ということで、「書を捨て町に出よう」ではなく、「書

を手に大学に行こう」そして「教室を劇場にしよう」。ライブこそ人生の醍醐味です。

3.

(1)

硬派？のあなたには、上村くにこ『恋愛達人の世界史』（たかが恋愛、されど恋愛）

軟派？のあなたには、カミュ『異邦人』（はじめてフランス語で読んだ小説）

(2)

硬派？のあなたには、ヒッチコックの「裏窓」（映画の映画の魅力）

軟派？のあなたには、小津安二郎の「東京物語」（生きて死ぬということ）

(3)

硬派？のあなたには、桂枝雀の「落語大全」（話芸＝顔芸の魅力）

軟派？のあなたには、グールド演奏のバッハ「ゴールドベルク変奏曲」（学部に入學当初、こればっかり聞いていましたっけ）

4.

傾く者たれ！歌舞伎のルーツは、傾く＝カブクにあります。みなさん、ご存知ですか？他者はもとより、つねに自分自身と距離を保ちつつ、自己中から遠く離れて生きること。極限を志向しつつ、熱し過ぎることもさめ過ぎることもなく、粹に生きることです。

先輩たちからのメッセージ

学際コースの卒業生からのひとこと

授業は「らく」、いや「大変」など、いろいろな意見がありますが、今後の参考と励みにしてください。

また、ここに意見を掲載したみなさんは「学際コース」の卒業生であり、「複合文化学科」では、必修科目を中心に、授業がよりシステマティックに組まれ、文化に関する科目をはじめ、情報関連科目や外国語科目などの授業も、これまで以上に充実していることを付言しておきます。

尾木 麻祐子（おぎ まゆこ）

学際コースは必修が少なく多分野の授業を受けられるため、趣味を貫き通せる。結果、楽をしようと思えばいくらでもできる。卒業論文のタイトル一覧が示すように、学際コースほど好きなテーマを選べる場所はない。「環境は提供するが学生の意思が第一」のモットー通り、「勉強させられている」義務ではなく、「勉強できる」権利をまっとうできたように思う。しかし権利には責任がつきものであるように、目標や目的を明確にしなければ、周りに流されて、結局、何を勉強してきたのか分からなくなってしまう危険性もあると感じた。

学際コースを担当されている教授方は、不謹慎ではあるが軟派から硬派までという言い方が相応しいぐらいに個性的な面々であり、専門分野も多種多様である。多くの尊敬できる教授に出会い、新しい視点や考え方を学び、未知の世界に足を踏み入れることができたことを、心から嬉しく思う。学際コースという新しい試みに尽力してくださった教授方に感謝したい。

加藤 裕行（かとう ひろゆき）

今期卒業の4年生は、4年進級時にゼミを変更した学年で、実質的には一年間しか原ゼミで学ぶことができませんでした。しかしこの一年間で学んだことは、他のゼミの2倍も3倍も濃かったのではないかと思います。このゼミの学生は各々が独自の問題意識を持っており、それに沿ってテーマを設定し、固有の切り口で諸現象に取り組んでいました。そのテーマはまさに多種多様で、教育問題、音楽、都市、広告、はてはウルトラマン、ドラえもんまでもが題材になりました。人によっては統一性のないゼミだと感じるかもしれませんが、しかし逆にいえば、それはつねに自分の知らなかった世界を紹介してくれる場とはならないで

しょうか？ 少なくとも私はそう感じました。そしてそれはかならず自分のテーマに深く結びつくことになります。それは何より原先生の指導によって、散らばった点が繋がって線になり、面になるからです。この経験を今後より大きく広げていくように努力していきたいと感じています。

菊池 佳祐（きくち けいすけ）

新入生のみなさまご入学おめでとうございます。

四年間を振り返ると、さまざまな「出会い」がありました。サークル、バイト、授業、学科、などなど……。大学生活ではそれまでとは比べものにならないほどたくさんの「出会い」があります。

なかでも、さまざまな領域から集まった学際コースの友人との出会いはとても刺激的でした。私が所属していたゼミでは、学生が自分の興味のあることに関して自主的に研究を進め、発表をします。友人たちの新鮮なテーマの切り口は、いつも私を焦らせ、同時に、励ましてくれました。この四年間、私は学際コースで出会った先生方や友人たちに支えられてきたように思います。

みなさんも、たくさんの「出会い」を大切にして、充実した大学生活を送ってください。

佐藤 文香（さとう あやか）

複合文化学科第一期生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

みなさんはこれから始まる大学生活に、どんな夢や希望を膨らませているのでしょうか？

複合文化学科は好きなことを学問にし、好きなだけ研究できる学科です。この自由な学び舎で、四年間をどのように過ごすかは、すべて自分次第です。ぜひ、自由な環境に甘んじることなく、自分の目で、耳で、口で、頭で、いろいろなことを吸収してってください。そして何か一つ「好きなもの」を見つけて、とことん向き合ってみてください。きっと驚くようなおもしろい発見があなたを待っているはずです。

正直、他の学科よりも楽しんで単位は取れないかもしれません。考える量やレポートやプレゼンも多いかもしれません。しかし、この学科に費やした時間、この学科で学んだことはあなたを人間的に大きく成長させるに違いありません。

ん。卒業生の多くが、今そのことを実感しています。

「学際コースに入って本当によかった！」と私たちが思ったように、みなさんも有意義な学生生活を送ってください。卒業生一同、みなさんを応援しています！

杉本 淳子（すぎもと あつこ）

私が卒業研究で取り組んだのは、ラテンアメリカにある多文化社会プエルトリコ島のアイデンティティや米国との関係を考えながら、日本人である自分自身のアイデンティティや日本と米国の関係を考えることでした。

学際コースには与えられた枠がありませんでした。だから、漠然と「多文化」や「アイデンティティ」などに興味はあったものの、なかなか研究の方向が定まらず迷った事もあります。でも、何か一つの学問の枠に閉じこもるのではなく、学問の枠を取り払ってさまざまな領域の問題に自分だけのオリジナルの切り口で取り組み、研究として形にしていける「学際」の作業こそが、学際コースの、そして来たる「複合文化学科」の醍醐味でもあるでしょう。

既存の考えや理論にとらわれずに自分のアンテナを張って、さまざまな物事を自分に引き付けて考えて下さい。私にとってはそれが遠く離れたラテンアメリカの島と日本を結びつける作業でした。みなさんも、ぜひ自分のオリジナルを見つけて下さい。

中村 俊介（なかむら しゅんすけ）

私は、2年生のときに、複合文化学科の前身である学際コースに編入しました。

それまでの専門から抜け出し、新設されたコースのなかに飛び込むことには大きな勇気をともないましたが、結果的にとても充実した日々を送ることができました。なぜなら、「授業」「教員」「学生」すべてにおいて非常に刺激のあるコースだったからです。

教育学部の中で、今年誕生したばかりの複合文化学科を選んだ新入生のみなさまは、おそらくそれまでの「学問」にはない、自分の人生に刺激を与えるような体験を望んでいる人が多いのではないのでしょうか。

大丈夫。その望みは、きっと叶えられます。

新入生のみなさま。社会人になったら通勤電車でハンペンのようにつぶされる日々が待っています（笑）。そのような過酷な環境に置かれても、決してくじけず、諦めない熱い想いと知恵を、複合文化学科の4年間で培ってください。複合文化学科の教員達は、そんな意欲を持ったみなさまとの出会いを楽しみにしていることでしょう。

本田 真穂（ほんだ まほ）

新入生のみなさん、ご入学、おめでとうございます！

この複合文化学科では、みなさんの興味の分野をとことん追求していけるめぐまれた環境が整っています。先生方や仲間たちのするどい議論を通して自分の発表を高めていくのは、ほんとに刺激的で楽しいことです。いろんな意見を出し合い、みんなで素晴らしい授業をつくっていきましょう。

学校外で集まる機会も多いです。グルメな先生と一緒に行くご飯は、食べる喜びを新しく発見できますよ。オンもオフも、素晴らしい仲間といっしょにめいっぱい食べて飲んで頭つかって、大学生活をますます充実させてください。私はここで一生ものの友達ができました。

大好きな授業が、こうしてひとつの学科として認められて、ますますレベルアップすることと思い、うれしいです。後輩のみなさんに心よりエールを送ります。

丸山 絵莉子（まるやま えりこ）

新入生のみなさん、御入学おめでとうございます！

4年前の今頃、私も、みなさんと同じように新しい生活に対する期待と大きな希望を抱きながら早稲田の門をくぐりました。

振り返ると私の大学生活は、自分の好きなことを学べる環境の中でとても充実したものでありました。それは、学際コースが自分の「好き」を学問にできる素晴らしい環境のもとにあったからです。

これまでの学際コースが複合文化学科としてさらにカリキュラムを充実させ生まれ変わった今、みなさんはそれぞれ興味のあることを思いっきり学ぶことができると思います。

たくさんの素晴らしい先生方、仲間と共に多くのことを学び、吸収し、4年後大きく成長した自分と出会えるように早稲田で過ごす日々を大切にしてください。

4年間という限られた時間をどのように過ごすかは自分次第です。

大学生活という貴重な時間を大切に、チャレンジスピリットを持ちながら、複合文化学科第一期生として新しい早稲田の歴史を刻んでいきましょう。

学際大賞の発表とコメント

2006 年度より、学際コースの学生の書いた卒業研究（複合文化学科の「卒業論文」に相当）のうち優秀な論文に学際大賞（金賞、銀賞、銅賞）が与えられることになりました。

その選考の結果を、学際コース委員長の村上公一先生より発表してもらいます。

学際コースでは、2006 年度より、学際コースの理念である学際的で総合的な今日的諸課題に対応した優秀な卒業論文について「学際コース大賞」を授与することとしました。多様な、そして優れた論文が多いなかでの選考は大変でしたが、以下の 4 論文を「学際コース大賞」（金賞、銅賞）に、3 論文を「奨励賞」に選びました。学際コースの発展・継承である複合文化学科の新入生のみなさんにも、紹介したいと思います。

なお、金賞、銅賞の 4 論文については、『[早稲田大学教育学部学際コース 学際コース大賞受賞論文集（卒業研究優秀論文集）](#)』として[学際コース HP](#)にて公開しています。本文を読んでみたい人はぜひご覧ください。

【金賞】

六本木 潤（指導教員：福田育弘）
「飲食がつくる時空間 ―演出装置としての酒―」

（選考理由）

日頃実践しつつもあまり顧みられない飲食行為に注目し、そのあり方を多面的に分析し、概念化を試みたものです。さまざまな方法論を用いながら具体的事例にもとづいた緻密な分析は学部学生の卒業研究としてはきわめて優れたものであり、また文章も練り上げられています。

【銅賞】

平松 里英（指導教員：小林宏一）
「『安心』 社会日本の変容」

（選考理由）

インターネット上のコミュニケーション空間の分析を通して、山岸俊男のいうところの「安心社会」に安住することもできず、かといって「信頼社会」への移行も成就しえていない現代日本の若者コミュニケーションの問題性を探ったものです。みずからの問題意識から出発して、多くの文献にあたりながら、着実に理論的考察を深めていっています。

吉田 清香（指導教員：村田久美子）
「テレビコマーシャルにおけるジェンダー」

（選考理由）

ジェンダーの視点からテレビコマーシャルを詳細に分析し、性別役割分担などの概念が根強く残り、利用されていることを明らかにしたものです。実際に放送された数多くのコマーシャルを録画し、詳細な談話分析を行い、それに基づいて論を展開しており、メッセージ性の高い論文になっています。

外山 理生（指導教員：原克）
「商品としての不登校―朝日新聞の不登校関連記事の分析―」

（選考理由）

一般に「不登校」と称されるもののイメージの形成を朝日新聞の関連記事の分析を通して明らかにしようとしたものです。的確な資料分析にもとづき「不登校」イメージの形成の過程をあぶりだすことに成功しています。

【銀賞】

該当者なし

【奨励賞】

石田 英弥（指導教員：久保純子）

Space-scale analysis on the fair weather rate and its time series change of sunshine duration with AMeDAS data

--Basic data for using renewable energy--

（選考理由）

複数地点の太陽光発電を接続することで、太陽光発電による出力を安定させることができるとの発想にもとづき、そのために適切な空間規模を、気象庁アメダスデータの解析により求めようとしたものです。アイデアの取得やデータの解析を自力で進め、また英文で論文をまとめてあります。

加藤 景子（指導教員：後藤雄介）

「ご近所の「ガイジン」さん—新宿区大久保地域のエスニックビジネスから「多文化共生」をみる—」

（選考理由）

エスニックビジネスを手がかりとして、市民団体「共住懇」の活動・調査や外国人経営者側からの活動などを分析することにより、大久保地区の多文化共生について考察したものです。聞き取り調査の実施、資料の詳細な分析を通して得られたものを明晰かつ説得的な論旨構成、文章展開でまとめている。

内田 康雄（指導教員：神尾達之）

「クロスメディア文化論」

（選考理由）

近年登場したメディア間の《競合＝共合》戦略である「クロスメディア」を取り上げ、そのメディア特性について本格的に考察したものです。これまで本格的に論じられたことのなかった「クロスメディア」について、メディア論を中心軸にすえ、さまざまな現代思想の知見を援用して緻密に論を組み立てています。

fukugou-bunka@eiga

リメイク映画の魅力

ハンフリー・ボガード、イングリッド・バーグマン主演の「カサブランカ」は、キザな台詞がちりばめられた映画としてつとに有名ですが、じつはこれをそのままパクったのが、石原裕次郎——石原都知事の弟で、足の長さで売った往年の大スター——出演の「夜霧よ今夜もありがとう」。主題曲と相俟って、甘いムードアクションの傑作が生まれました（「赤い波止場」も「望郷ペペルモコ」の翻案ですし、「赤いハンカチ」は「第三の男」を彷彿させます）。

映画の魅力が、ひとえに時空を縦横無尽に踏み越える（いや踏みこむ？）大胆なまでのえげつなさ——もちろん褒め言葉です——にあるとすれば、ここ数年、日本映画を換骨奪胎している韓流映画はいうにおよばず、古くは「世界のクロサワ」をパクったマカロニウエスタン——「荒野の用心棒」ほか——のえげつなさもなかなかなもの。ただし、黒澤監督自身、ジョン・フォードの西部劇からインスパイアされていることは周知の事実ですが。

最近でも、フランス映画「ニキータ」や「赤ちゃんに乾杯」をリメイクした「アサシン」や「スリーメン・アンド・ア・ベイビー」、周防正行監督の「Shall We ダンス？」のハリウッドリメイク版などなど、挙げていけばきりがありません。良質なシナリオ不足、市場の確保がその因とされていますが、オリジナル／コピー、原作／パロディの関係を越えて、映画の越境化はとどまることをしりません。

あとかたもないほど改変されてしまう、いや改変してしまうえげつなさこそ、映画の力であり、猥雑なまでの魅力といえるかもしれません。映画そのものがコピー文化の申し子である以上、コピーがコピーを生み、いつのまにか、摩訶不思議な世界を現出しているのも、当然といえば当然のことなのかもしれませんが。（W）

第9号は5月1日発行の予定です。

背景画像：桜ヶ丘の桜、©2007 I. Fukuda